

第四章 出兵決す

バウアーシュミット医師の招喚が決定されてこの方、ラインハルトの健康状態は悪くない。熱を出すことはなくなり、本人に言わせれば体調は万全である。同盟首都での騒乱とレンネンカンプの遭難の際にはやや精彩を欠くかに見えた、政治・軍事両面にわたる判断にもいつものラインハルトらしい明晰さと鮮鋭さが戻ってきている。

あるいは杞憂だったのかも知れない。思わぬでもないキルヒアイスだったが、バウアーシュミットが提出したはずの報告書はいまだに発見できておらず、内国安全保障局もまた報告書の所在については関知せずの態度を変えていなかった。

キルヒアイスは何度も内国安全保障局を訪ね、ラング局長に面談を申し入れた。何度も不在を申し立てられて後、登庁途中に停止させたラングの専用車の中で面談に及ぶという強行策を採った。

「ラング局長には本当にご存じないのですか、バウアーシュミット医師がマリィンドルフ伯爵に提出したはずの報告書の所在です」「キルヒアイスが問うたのはただそれだけだった。

「そ、そのような……そのようなものは……」
「ご存じないと仰る？」

血色の良い、母乳に満ち足りた赤ん坊の相似形を称されるハイドリッヒ・ラングの顔面が一気に蒼白になり、頭頂部から、くびれた顎の先までが汗に濡れるのをキルヒアイスは確認した。それで十

分だった。

「い、いかなる証拠があつて、吾々が……そのような不正を働いたなどと……」

「ご存じないなら、それで良いのです」

ラングの言葉などに、キルヒアイスはまったく信を置いていなかった。彼の表情と口調がすべてを語っていた。ラングは知っている。ラングは何かしらの意図を以て、バウアーシュミット医師の報告書を握りつぶし、ラインハルト自身にもキルヒアイスにも知らせぬままに闇に葬るつもりとしている。そのこと自体、キルヒアイスに押さえ切れぬ不安を感じさせるに十分だった。

ラングの能力を、キルヒアイスは好んではいなかったが決して軽視していない。長年にわたり旧王朝の社会秩序維持局長を務め、新王朝に於いてもその権力基盤を確立するのに少なからぬ働きをした事実は否定できない。ラングは情報に対して鋭敏な感覚の持ち主であり、現在の帝国政府においては極めて優れた情報処理の能力を持った能吏でもあるのだ。

ラインハルトの健康に何らの不安もないのであれば、ラングが報告書を隠匿する理由はない。ラングが、占有することで彼自身あるいは彼の仲間にとって何らかの有利さにつながる情報を見出したからこそ、敢えてキルヒアイスらの目から報告書の所在を隠しておおせよつとしているのではないか。それはすなわち、報告書の所見がラインハルトにとって歓迎すべからざる内容であり、しかも、ラングによる秘匿の意図が彼の恣意に基づくものであることを意味する。

「それだけ聞けば十分です」

「て、帝国大公閣下」

言い捨て、車を降りたキルヒアイスの背を、ラングの声がねつ響きを帯びておいかけた。無視して立ち去ろうとしたキルヒアイスだったが、ラングの次の言葉が彼の足を舗面に縫い止めた。

「臣は、閣下がグリューネワルト大公妃と一夜を共にされたことは存じております。それを閣下が皇帝陛下にお話しになっていないことも、です」

瞬時、胸を氷の刃で貫かれた感覚にキルヒアイスは一瞬凝固した。

事実だった。ゴールデンバウム王朝最後の皇帝エルウィン・ヨーゼフ二世が誘拐され、その所在が杳として知れなかった時期、キルヒアイスはアンネローゼと一夜の契りを結んだ。アンネローゼがラインハルトと彼の許を離れ、フロイデンへ隠棲した真の理由こそ、あの一夜だったこと。知るものは彼の他はアンネローゼただ一人だった。無論、アンネローゼがラインハルトに語った、人々が彼女の背にゴールデンバウムの亡霊を見るだろつという理由、それもまた彼女をして帝都を去らせた大きな理由でもあるのだが。

ラングの頭部は水でも浴びたかのような姿になったが、底光りした不快な熱を帯びた目で、青い氷の刃を思わせるキルヒアイスの凝視を受け止めるのは止めなかった。

「し、臣は当時のローエングラム公爵閣下に厳しくお叱りを受けました。大公妃の個人回線を無断で盗聴してしまいましたこと、そのような許可を与えた覚えはないと。まことに、臣の不覚であり、不敬の極みであったと恐懼の極みにございます。でございますが、帝国大公、閣下は皇帝陛下に対し奉り、お隠しになられていることがある。これもまた事実ではあり、不敬に類することではありますまいか」「それは、私に取引を持ちかけているのですか、ラング局長」

キルヒアイスの応答は、あるいはオーベルシュタインにこそ相応しかったかも知れない。

「大公妃と私の間にあったことを隠しておいてやる代わりに、報告書の件については口を噤めと、卿はそう言うのですか」

ラングは痙攣するように巨体を震わせた。背を向けていてさえ、またその口調がいつに変わらぬ穏やかさに満ちていたとしても、紛れもない激怒の響きを聞き逃すほどにラングは鈍感ではなかった。絶対零度の冷徹さと灼熱の怒りが逆に口調を極度に平板なものに変え、言葉の形をした刃となってラングの聴覚を貫いたかに見えた。「とんでもありません、帝国大公閣下。臣はただご忠告申し上げただけでございます。閣下は皇帝陛下の腹心にして二なき方。どのような仮初めのことと言えども、皇帝陛下と隙を生じるが如きことはお避けになるが賢明であると」

「それで……？」

「臣一人の胸に抱えておりますには、些か以上に荷が重すぎる秘め事かと。ご賢察を持って、皇帝陛下に事実をお告げになりますように。秘密情報の扱いのみを任とする臣の戯言よとお聞き流し下さるのも、それは閣下のご選択ではありますが、我が身に持て扱いかねるほどの情報はいずれ公にせざるを得ぬかと愚考する次第であります」

言葉がどつあるつと、これは脅迫だった。それ以上に彼の怒りを買ったのは、アンネローゼへの、絶対に汚してはならぬ想いを、この男はまるでカードの掛け金であるかのように目の前のテーブルに載せて見せているのだ。まるでアンネローゼその人を汚されたような憤怒に突き上げられて右手が腰の銃把にかかるのを押さええられなかった。

キルヒアイスは振り返らなかつた。振り返つた瞬間、抜き打ちにラングの肩間に光の剣を突き刺す衝動を抑え切るのに、キルヒアイスはありたけの自制心を動員せねばならなかつた。

「局長、私はパウアーシュミット医師の報告書の所在をお尋ねしました。局長は知らぬと言われたし、私は局長の言葉を否定できる証拠を持っていません。いずれ、近いうちにドクトル・パウアーシュミットには帝都に戻つて貰います。その時、失われた報告書の詳細も聞けましょつ。卿は何も知らなかつた。報告書は何らかの手違いで紛失した。それで宜しいではありませんか」

「は……」

恐懼の声と上体をひれ伏す気配。裏腹に、粘り着くようなねつく、瞋恚に満ちた視線をキルヒアイスは背に感じた。

「グリューネワルト大公妃のことは、私は何も聞きませんでした……お時間を取らせて申し訳ありませんでした、ラング局長」

一度も振り返ることなく、キルヒアイスはラングを置き捨てて自らの車に戻つた。あの時、その場でラングを射殺しなかつた自らの判断の正しさに、未だキルヒアイスは確信が持てぬほどである。

ラングからの取引の申し入れはキルヒアイスを激怒させたが、同時に一面でのラングの正しさを認めてもいる。アンネローゼとこのことをいつまでもラインハルトに隠しておくべきではない。ラングの言つ通り、新王朝の今後の安定と繁栄の礎に、此細ではあつても皇帝と帝国大公の間に隙を穿つことはあつてはならないのだ。

いずれにしてもラングが何らかの意図をもってパウアーシュミット報告書を隠匿したことは確実であり、その胸に臣従を誓つた時とは異なる意図を蔵しているに違いないことをキルヒアイスは確信したのである。『ユミ箱の底を覗いてすら、そこに美を見出す』

などとラインハルトにからかわれたことのあるキルヒアイスではあつても、その許容範囲にはおのずから限度がある。この時点に於いて、キルヒアイスはラングに対して内心に『佞臣』のラベルを貼り付けていたし、取るに足らない『佞臣』により一國が覆された歴史からの教訓についても無知ではなかつた。

そして、新帝国暦一年六月二四日。

『パウアーシュミット准教授、無事に帝都宇宙港に到着。文理科大
学到着は本日一四時三〇分の予定。現在、装甲擲弾兵第一二二連隊
の一個小隊の護衛のもと、大学へ向かいつつあり。准教授本人、お
よびその家族の健康状態は極めて良好』

ルヒンスキーを失望させた知らせがキルヒアイスにとって朗報であつたことは言つまでもない。

副官ラーゼン中尉からの報告に頷いたキルヒアイスは、ただちにヒルダを呼び出した。

『ドクトル・パウアーシュミットが着いたのでですね？』

ヒルダの声も喜色を抑えきれなかつた。

「皇帝陛下にキルヒアイスが会いたいとお伝え下さい」

『申し伝えます。今のご用談はあと一〇分程度で終わる予定です』

「ありがとうございます、フロイライン。皇帝陛下がどこかへ行つておしまいにならぬよう、見張つていて下さい」

『はい、確かに見張つておきます』

ヒルダの声がやや憂色を薄めたかに聞こえた。

『閣下、ラーゼンです』

通話が切れると同時に副官の姿がスクリーンに現れた。

『例の文書研究に関する件ですが、帝立大学からは了解を得ました。』

護衛チームの編成はすでに終わりました。配備も明日には終わる予定で、ギレンセン大尉の参加も部隊からの了承を得ています。情報の公開については発表原案を作成しましたので、内容ご確認下さい」

「わかりました。ありがとつ、中尉。護衛チームの件ですが、タウゼントシュタイン大尉の方はどうなっていますか」

『無論、婚約者のフロイライン・ウルシュラ・ザーネヘルシュテラーともども護衛の対象となっています。大尉は軍大学に合格され、この一〇月にはフロイライン・ザーネヘルシュテラーと結婚されると言うことです。当分は帝都をお出にならないでしょう。それと、ロートリンゲン伯爵夫人も併せて護衛対象としてありますが、宜しいでしょうか』

「それで良いです。中々活発な貴婦人ですらうしやるようですから、護衛も大変でしょうけれど、よろしくお願いします」

相手が歴史の間に潜み、暴力により正体の暴露を拒絶するなら、それを上回る力でその存在を明らかにしてくれる。それがキルヒアイスの考えである。『シュミットパウアー文書』の研究を正式に帝立大学のローゼンマイヤー教授に委託すると同時に、その所在自体の公開を決定し、ラインハルトの裁可を受けたのである。

もつとも、旧帝国の暗部に潜み、なお蠢動を続けている地下組織、あるいは秘密結社の存在についてキルヒアイスが説明したとき、ラインハルトは最初の内、眉を顰めたものである。

「裏社会の秘密結社だと？子供というか、中学生の妄想のような話だな、キルヒアイス。一体、どこの書棚の裏からそんな馬鹿げた話を引っ張り出してきたんだ？」

「妄想に近い話であることは分かっています。ですが、お忘れです

が、あの『決闘者』のことを……」

「いきなり、古い話を持ち出すんだな」

ラインハルトが『決闘者』なる人物に初めて、そしてただ一度だけ関わったのは旧帝国暦四八三年のこと。ラインハルトはまだ一六歳に数ヶ月を残した一五歳。前年末に初陣で戦功を上げ、中尉の地位を得たばかりの時だった。ひよんな行きがかりからシャフハウゼン子爵の代理として立つことになった決闘の場、リッテンハイム侯爵家の代理としてラインハルトに対峙したのが『死の臭い』を全身に纏わり付かせた一人の男。大貴族から委託を受け、代理決闘を専門職とする『決闘者』だった。

「陛下を負傷させた、初めての男でした。あやつは、決闘者の組織があり、決闘に失敗した者は組織から排除されるようなことを言っていました」

「……お前は決闘者の組織がそのまま暗殺請負の組織でもある、と言っのか」

初めてラインハルトの表情から揶揄と懐疑が消えた。戦場、あるいは個人的な決闘や乱闘の場においてラインハルトが敵手に圧倒された例は皆無に近い。精神的にも肉体的にも、である。あの決闘者との対決はラインハルトにとって敵に気圧された記憶を残した稀少な経験だった。

無論、この時点でラインハルトもキルヒアイスも、『敵』に対する正確な洞察を得ていたわけではない。ラインハルトは、言ってみれば自らの稀少な体験から直感的に、『敵』の本質の直前に達していたといっべきだったろう。

ともかくもラインハルトの許可のもと、キルヒアイスは『シュミットパウアー文書』の存在を公然化し、この目に見えぬ『敵』を

も併せ炙り出す覚悟をさだめている。同盟が騒乱に陥り、その一刻も早い安定が望まれる中、旧王朝の亡霊のような地下組織に^{ほし}恣^まな蠢動を許せるものではなかった。

皇帝執務室に入ったとき、キルヒアイスは憮然として座すラインハルトと、ちょっと困ったように執務机の前に佇むヒルダの姿を見出した。

「ドクトル・パウアーシュミットのごとはフロイライン・マリンドルフから聞いた。それで予に何をしろというのだ」

「ドクトルに検診を受けて頂きます。これは申し上げてあつたはずですが」

「予が病だというのが。確かに熱も出した。身体に不調がなかったと言えば嘘になるが、今はもう何ともない。わざわざ、ドクトル・パウアーシュミットを帝都に呼び戻してまで診てもらわねばならないほど悪いとは思えぬ」

パウアーシュミット医師の謹慎を解き、帝都に呼び戻したことで自体は正しい処置であり、反対する言われもないことだが……ラインハルトは付け加え、改めて目の二人に憮然とした視線を投げた。「ドクトル・パウアーシュミットには二八日にこちらに出向いて頂きます。ドクトルが所要と考える全ての準備を整えた上で、です。ことが杞憂で済めばよし、万が一にもお身体に何か異変が生じているのであれば、ただちに処置に入らねばなりません。この多事多端の折、陛下の体調には万全を期して頂かねばなりませんから」

シュタインメッツが同盟政府に対して最後通告を發したのは六月初旬。既に回答期限は切れているが、同盟政府からの正式な回答はない。その間にレンネンカンフの消息は明らかになり、ヤン・ウエーラーと同盟政府の裏取引、さらにはヤン一党の同盟首都からの脱

出も帝国政府の知るところとなつてゐる。

『同盟政府に対手たるべき資格なし』

シュタインメッツからは皇帝ラインハルトの決断を要請する報告が繰り返して入つてきている。既に帝国全軍に対する動員令は発令されており、遠征艦隊の編成も完了している。ラインハルトの勅令が下れば、数万隻の帝国軍艦隊はイゼルローンとフェザン、二つの回廊から流れ込み、鋼鉄の怒濤となつて同盟領全域を席卷するだろう。事態の急速な進展を遅らせていた唯一の要因がラインハルトの体調不良であり、自身の不調に最も可立っていたのが他ならぬラインハルト本人だったのである。

同盟領の状況は一刻毎に混迷を深めていた。シュタインメッツが最終通告を發して直ぐにケリム星区が同盟からの離脱を宣言、一週間を経ずしてジャムシード、ルドミラ、ティベステイ、ライガールの各星区がケリムに続いている。これらの星区は同盟からの離脱と同時に事実上の帝国領入りを希望したが、一方で六月中旬にはやはり同盟からの独立を宣言したエル・ファシルは帝国領入りを拒否して独自の道に歩を進めている。

ラインハルトにとつて刻々に動きを早めていく状況を前に、ただ静観を守っている自らに納得しがたい思いを抱いている。彼はこれまで状況を支配こそしてきたが、状況に支配されることに馴れていなかったし、それが自らの体調不振によるものである以上、苛立ちがなお募らうというものであった。

体調の回復を自覚すると直ちにラインハルトは政府と軍首脳による御前会議を招集した。一刻も早く事態を收拾し、状況を彼の制御下に置くと共に、消息を絶つてゐるヤン一党との交渉も急務である。それがラインハルトの希望であり、御前会議は二八日に予定さ

れていた。

「精密検査は二八日の午前中に終わらせて貰います。御前会議は午後に……ですね、フロイライン・マリンドルフ」

「ええ、二三時より開始の予定です。既に軍二長官と國務尚書他の主要閣僚のスケジュールは確保済みです」

「キルヒアイス、それにフロイライン……」

「陛下がお元気でないとわたくしどもは安んじて業務に当たることができません。どうか、わたくしたちを安堵させて下さい」

「しかし……どこも悪くないのに、半日も診察に時を費やすのは無駄ではないか。もっと短縮できないのか？」

「パウアーシュミット医師からは最小限度の所要時間を確認してあります。八時から一時まで、三時間の予定です……ああ、それと、この件に関してグリューネワルト伯爵夫人からメッセージを頂いています」

「な、姉上から？」

驚いて腰を浮かせるラインハルトを尻目に、ヒルダの操作でアンネローゼの姿がスクリーンに浮かび上がった。ラインハルトの戴冠に伴って、フロイデンの山中からシュート・カールデン南苑に一時的に居を移したものの、自ら進んでラインハルトたちと接触しようとしてこなかったアンネローゼにして、珍しい出来事と言えた。ラインハルトが受診に対して拒否や躊躇を示すことを予想したキルヒアイスがアンネローゼに予めメッセージを送っておいたのだ。期せずして、ヒルダもアンネローゼにラインハルトの説得を依頼しており、アンネローゼもそれに応えてくれた格好だった。

『ラインハルト、ジークやヒルダさんが心配しているのは、心配するだけの理由があるからと言っことを分かって下さい。それに、あ

なたの身体はもうあなた一人のものではないということも分かって下さいね。ドクトル・パウアーシュミットも、あなたのために研究を進めて下さっていたと聞きました。どうか、みんなの気遣いを無駄にしないように……我が儘を言わないで下さいね、ラインハルト』

キルヒアイスにとって意外なことにアンネローゼは微笑っていなかった。いつもなら伏し目がちな、けぶるように長い睫毛の目を真っ直ぐにラインハルトに向けた表情は硬かった。弟の悪戯を見出した時のそれによく似た、やや哀しげな眼差しにラインハルトの白哲が紅潮するのがキルヒアイスにもはつきり見えた。

ふとアンネローゼの表情がさらに変わるのを、キルヒアイスは確かに見たと思った。まるで、ラインハルトの姿を目の当たりにしているかのように、上げた視線が正面からラインハルトを見詰めたのだ。

『……それと、フロイデンの館ができたと聞きました。早い内にそちらに引き移りたいと思います。あなたの言うように、このまま会いませぬにお別れするのはよくないことだと思えます。ジークと一緒にシュート・カールデン南苑に来て下さるかしら。日は、そちらで決めて下さい。わたしには予定というほどのものはありませんから……』

ラインハルトの頬が微かに紅潮した。

「ええ、姉上、是非伺います。キルヒアイス、お前も良いな？」
リアルタイムの映像でないことを脳裡から吹っ飛ばしてしまったらしい。ラインハルトは完全に立ち上がり、両手をついて前のめりにスクリーンを覗き込んでいた。

「ええ、勿論です」

「……では、二八日の午前八時だな。分かった。ドクトルにはよろ

しく伝えてくれ。再会を楽しみにしている」とな

これあるかな、ラインハルトさま……思い、キルヒアイスは同時に、アンネローゼの抱く危惧の一端に触れた思いだった。キルヒアイズとヒルダでも困難を覚えるラインハルトの説得。それをアンネローゼはただ一通のメッセージで果たしてしまった。アンネローゼが恐れているのは、『前王朝の皇帝の寵姫が、姉への信頼と愛情に乗じて新皇帝を籠絡しようとしている』という周囲の視線だろう。本人の意図や意思はともかく、ラインハルトが自らの判断よりもアンネローゼの意思を優先させるといふ表面だけ、ことの経緯だけを見れば、そのような解釈が成り立つても不思議ではないのだ。

誰もがアンネローゼに前王朝の影を見なくなる日、その日の招来が困難で遠いものであることをキルヒアイズは改めて実感せざるを得なかった。このまま時が過去の記憶を摩耗させるのを待ち続けても、あるいはその日は来ないのではないか。アンネローゼが彼らの許に戻ってくる日は永遠に来ないのではないか。そして、アンネローゼもそれを知っているのではないか。キルヒアイズは初めて、内心に激しい苛立ちと焦りを覚えるのを感じた。何か、今までとは全く違うことをしなければならぬ。では、どんなことをすれば良いのだろうか。

内心の波立ちを押し隠すのをこれほどに苦痛に思えたのは、ラインハルトに会って以来、初めてのこのようにキルヒアイズには思われた。

キルヒアイズの内心はともかく、南^{シュート・カザン}苑のアンネローゼ邸訪問は、一八日の夜、おそろくは同盟領への出兵を決することになるであろう御前会議を終えて後のことに定められた。ラインハルト、キルヒアイズの二人にとって半年ぶりのアンネローゼとの対面と

なるはずで、キルヒアイズにとっても心躍る出来事になるに違いなかった。

シュロスホテル・アム・カイザープラッツのウジー・ザーネヘルシュテラーのもとに、あの貴婦人フロレンティア・フォン・マイヤーハイムからのメッセージが届いたのは、同じ日の夕方だった。六月二七日の一八時、届け先は国立オーディン文理科大学の職員専用食堂。

メッセージを受けた支配人は、早速に文理科大学に連絡を取り、その日のその時間、細やかな規模であるが職員食堂で複数の歓送迎会や祝賀会が開かれることを確認するほどには慎重だった。無論、フロレンティア・フォン・マイヤーハイムなる貴婦人の実在については、オーダーを受けた時点で内務省典礼局……旧典礼省である……に確認済みである。一時期、旧貴族を名乗った詐欺や悪戯が横行したことがあり、依頼主の実在確認がホテルなどの業務マニユアルに組み入れられて久しい。

映話を終えると、彼はまだ厨房にいたウジーを呼び出し、『フラウ・マイヤーハイムからのオーダー、確認した』と告げた。

「確認は取った。シュロスホテル・アム・カイザープラッツのレストランからケーキが届けられるという届けもちゃんと出していたぞうだ。いつもの通りで頼むぞ」

「はい、頑張ります」

ウジーにしてみれば元々好きで選んだ職業でもあり、決まり切った通常業務以外に個別のオーダーでの仕事ができるのは歓迎でもある。屈託なく笑う彼女に、支配人は急に申し訳なさそうな表情になった。

「済まない、ウジー。忘れていた、明日なんだが、出張を頼みたいんだが……と言っても、帝都の内のことなんだが」

「どこかのお屋敷ですね？」

「ああ、マリィンドルフ伯爵様のお屋敷だ。お抱えのパーティシエが急病で寝込んでしまったらしい」

依頼が入ったのは一昨日、昨日と今日は何とかしのげたということのだが、明日は諸般の事情が重なって屋敷の厨房にパーティシエを欠くわけにはいかなかったのだという。

「ウジーは明日は非番だったからな、何とかしようとしたんだが、結局、どれもこれも上手くいかなくなって……明日、デートだなんてことはないのか」

「良いですよ、マリィンドルフ伯爵様の所なら伺ったこともあるし、ヒルダお嬢さまとお会いしたこともありですから……それにミハエルも忙しくて、明日はちょっと時間が合わなかったんですよ」

「悪い、頼む。代わりの休みは首席(パーティシエ)と調整してくれ、こちでもウジーの希望通りになるようにするから」

翌日の昼過ぎ、ウジーが帝都のマリィンドルフ伯爵邸を訪ねることにしたのは、そうした偶然がはじき出したサイコロの目の結果だった。

ウジーの密かな期待に反してマリィンドルフ伯爵邸で彼女を出迎えたのは、執事のハンス・シュテルツァーだった。無論、彼の方もウジーの顔見知りである。「こちらは予想通り、夕食用のデザート調製が依頼だった」

「フランチ様とお嬢さまだけのお食事用なら、ケータリングを依頼すれば済むことだったのだがね」

この日、マリィンドルフ伯爵家の親戚が何人か、伯爵を訪問す

る予定であり、晚餐のために、厨房にパーティシエを控えさせておかねばならなくなったのだという。どちらかと言えば苦々しさを感じさせるハンスの口調から、かなり我が儘で口うるさい親戚がいるらしい。ウジーはそう推測した。

この親戚への対応のためだろう、フランチ卿は早めに国務省から帰宅し、晚餐の席が開かれたのは二〇時過ぎのこと。一方、ヒルダの方は皇帝主席秘書官と幕僚総監としての業務が繁忙を極めており、帰宅は深更に至るとのことだった。ただ、何となくヒルダが多忙を理由に、父を盾にしてこの親戚を避けているのではないかと……それがウジーの直感だった。

「ヒルダお嬢さまにお会いできないのは残念だけれどね、ま、いつか」

どんなときもウジーは陽気で前向きである。予想通り、晚餐の席からは様々な我が儘や難癖が長蛇の列となって厨房へ流れ込んで来て、シエフも使用人たちも、猫の目のようにくるくると変わる客からの注文に戦場のような騒ぎに巻き込まれた。無論、ウジーも例外ではなかったが、さすがに我が儘を極めた客たちも、デザート段階に至ると言いたい放題の苦情のネタもその底を突いたらしく、デザート作り直しは前後合計で五回で済んだ。

「あら……美味しそうね」

ウジーを仰天させたことに、作り直しさせられて晚餐のテーブルから下げられたデザートを若い使用人たちと一緒に無駄なく処分……要するに自分たちの自身のデザートとして賞味している最中に、ひょっこりと厨房に姿を現したのがヒルダその人だったのだ。

「ぎゃ、お、お嬢さまー」
「ぎゃ、お、お嬢さまー」
「ぎゃ、はないでしょう、ウジー」

ヒルダはからかうように微笑い、クリームをつけたままのウジの頬を軽くつついた。

「だって、こんなところにいきなり、入ってこられるなんて!」

「いいのよ、今日のお客様とは、できれば顔を合わせたくないの。ハンスにお願いで、こっちの出入り口から入れてもらったのよ。これがウジの最新作なの?」一つ、貰って良いかしら」

「お、お食事は?」

「元帥府で済ませてきたわ。ただし、デザートは抜きよ。ウジが来てくれるってハンスから聞いたから」

恐縮です……慌てて立ち上がり、ウジは切り分けたケーキにハーブティーを添えてヒルダに勧めた。コーヒーの用意もあったのだが、既に午後二〇時を回った時間帯である。何と言ってもカプエインの刺激は睡眠を阻害するし、第一美容に良くない。

ヒルダは微笑んで謝意を示した。

厨房の片隅、シェフや用人たちの食事前テーブルについてデザートを口に運ぶ『お嬢さま』に誰も驚かないのもいつものことだといつ。

「……明後日の夕方は大学の先生たちのお祝いにホールのケーキを調製するんです」

話題がそちらに振れたのは、やはりデザートを前にしての会話だったからに違いない。

「大学、どこの?」

ヒルダの眉が微妙な角度に動いた。

「文理科大学って聞きました。お客様は私に自分で持って行ってくられて、なんか変なご依頼ですよ、その場で飴細工パフォーマンスでもしてくれていうんなら別ですけど、それもなかったし。単

なるお使いに、お金払ってまで作った人間に配達に行かせるなんて」

「そう……」

綺麗な形の良い金色の眉がきゅっと縦皺を寄せるのに、ウジはああ、こんな綺麗な人なのに、あんな風に縦皺寄せたら痕が残っちゃう」と慌てる。

「どなたなの、そのお客様?」

「えと……それは、ご免なさい、ヒルダさま。それはいわゆる『職業上の秘密』です。そう言う依頼画あったことは話しても良いけど、誰がというのは駄目だって」

「そうね。それなら無理には聞かないわ。あさってだから二七日程、その夕方、文理科大学ね」

「はい」

「分かったわ。ありがとう、ウジ。凄く腕 上げたわね。美味しかった。私はこの辺で引き上げます」

いつまでもここにいると片付かないし、みんなが窮屈に感じるだろうから……とヒルダは綺麗に空にしたケーキ皿とティー・カップを後に軽やかに身を翻した。それを合図に後片付けが始まり、ウジも一同に挨拶すると厨房を後にした。

「ウジ」

途中、声をかけてきたのはハンスだった。車を用意したと言つ。

「お嬢さまからのご指示です。安全にはなりましたが、帝都の深夜女性の一人歩きは勧められないと仰っておいでです」

「そんな大げさなことしていただくなくても……」

言い止し、ウジは一九歳の時の経験を思い出し、有り難く好意を受けることにする。あの時は運が良かった。あんな幸運が二度

繰り返すと思ひ込むほど、ウジーも運命の好意を信じていない。

「では、良い夜を、ウジー」

封筒を渡された。中身は、半日の労働に対しては過分と思われるほどのチップと、それから走り書きのメモが一通。

「文理科大学に行く前に、一度ここへ連絡して下さい、ヒルダ」

ウジーは首を捻った。ヒルダの勤務先、おそらくは皇帝主席秘書官室への直通ラインらしい一連の番号とメールアドレスが記載されていた。

六月二七日夕刻、国立文理科大学のキャンパスで起きた爆発は決して大きなものではなかったから、本来は即時に帝国大公キルヒアイスのもとにその報告が達すると言つことはありえないことだった。実際、キルヒアイズに事件を知らせたのは、帝都の警備を担当する憲兵総監部でもなければ、治安維持担当の内国安全保障局でもなかった。

皇帝ラインハルトから直接の呼び出しが入ったとき、キルヒアイズは『シュミットバウアー文書』に基づく統治組織に関する報告を受けているところだった。研究はすでにかんりの段階までですんでおり、あと一ヶ月もすれば具体的な上申案としてラインハルトにも提出できるレベルにまで達していたのである。

「お急ぎですか、陛下？」

報告はほぼ終わりかかっていたが、キルヒアイズにはこのあと二人の人物と面会する予定があった。帝立大学のローゼンマイヤー教授、そしてロートリンゲン伯爵夫人である。

『レオンハルト日誌』と呼ばれるようになったレオンハルト・

フォン・シュミットバウアーの日誌の分析を、キルヒアイズは正規の研究組織に委託することを決定し、ラインハルトの裁可も得ている。彼の選んだ研究組織が、帝立大学のローゼンマイヤー研究室、もつひとつがロートリンゲン伯爵夫人が理事長を務める『ラストエント財団』。前者は帝国中史の権威であり、後者は帝国語以外の多数の言語研究を専門とする組織であり、手記の分析に最適とみられていた。

『ローゼンマイヤー教授とロートリンゲン伯爵夫人は来られているな？』

「ええ、今、お待ちいただいていますけど……なにか？」

「一緒に来て頂け」

ラインハルトの言葉が短い。声に微かな怒りと、これはキルヒアイズにとって信じがたいことに動揺が感じられ、それが彼の行動を促した。

「直ぐに参ります」

ラーゼン中尉を呼び、待合室の女性一人を案内するよう命じる。キルヒアイズが執務室を出ると、中尉に先導された二人がちょうど到着したところだった。

「皇帝陛下がお二人とお会いしたいと仰っています。予定外のことですが、ご同行をお願いします」

ローゼンマイヤー教授が何かを言い止すのを制して、ラーゼン中尉に短く指示を与える。帝都内で何かが起きていないかを確認して下さい……敬礼し、中尉が身を翻すのに、もつ一顧だにせず、キルヒアイズは踵を返した。

「文理科大学が爆破された」

三人が執務室に入ると同時に、ラインハルトの第一声が出迎え

た。

キルヒアイスを驚かせ、動揺させるのは容易なことではないが、この時、ラインハルトはその難事をこともなげにやってのけたことになる。

「爆破ですって?」

「爆破だ……フロイライン・マリィンドルフ」

ラインハルトの促す声に初めてヒルダの存在に気付くほど、この時のキルヒアイスは確かに虚を突かれ、一時的にラインハルト以外の人物を視野から閉め出していたのである。

「失礼した、教授、伯爵夫人、お席にお着き下さい……」

ラインハルトも同様だったのかも知れない。ヒルダが、僅かに眉を顰めて投げた視線で、キルヒアイスの同行者に気づいたようだった。

「場所は文理科大学の職員専用食堂。発生時刻は一八時二二分でした」

キルヒアイスは思わず壁を見上げ、現在時間を確認する。一八時五六分。発生から約二〇分。帝都内のささやかな事件、あるいは事故が皇帝の耳に達するにしている異例の速さだった。

「爆発は、半径二〇メートルの人間に対して十分以上の殺傷力を有する、強力なものだと報告されています」

この日、文理科大学職員専用食堂では、新たに大学に加わった研究者や職員に対する歓迎会が何件か開かれており、爆発はその中の一つのテールで起きた。爆発が起きた時、食堂内には約五〇名の教職員がおり、現時点で判明しているだけでも半数が即死、他も重軽傷を負って逐次に病院に収容されつつある。

「事故の可能性はないのですね」

ラインハルトとヒルダ、特に顔面を雪花石膏のように白く強ばらせたヒルダの表情からそれは知れたが、キルヒアイスは念を押す。食堂内の爆発であれば、炊事用の燃料が何らかの原因で引火爆発したということも考えられるのではないかと。

「それはない」

再び短くラインハルトが応じる。ヒルダほどではないが白哲は硬質なラインを描き、蒼氷色アイスブルーの双眸も封じ込めた怒りに青く揺らめいて見えた。

「爆発したのは、グループの一つが逃えたケーキでした」

「ケーキ?」

「ええ、シユロスホテル・アム・カイザープラッツのメイン・ダイニングがオーダーを受けて調製した、大型のケーキです。一八時に、ホテルのパーティシエが自ら届けに来ています。予め、ケーキが届くことは大学に届け出られており、時間もぴったりだったとこのことです」

「ラ……いえ、皇帝陛下、フロイライン・マリィンドルフ。文理科大学の、新任の教職員の歓迎会とおっしゃいましたね?」

「言った。それが、教授と伯爵夫人にご足労願った理由だ……お前ことだから、もつ察していると思う。ドクトル・パウアーシュミットも、この歓迎会に出席していた。それだけではない。ローゼンマイヤール教授、ロートリンゲン伯爵夫人、こちらのリストをご覧ください」

壁の二画が明るくなり、リストが表示される。一〇数名分の人名を示すリストに視線を走らせ、二人の女性が軽く息を呑む音が室内に響く。

「これは……私の研究室のメンバーです」

「こちらには……財団の、同盟公用語研究のメンバーですわね……今回、帝国大公からの依頼であの文書の研究に当たることになっていました」

「そう、このメンバーも伯爵夫人の財団メンバーと一緒にプロジェクト・チームを組むことが決まっていました。今日、帝国大公閣下にプロジェクト・チームの体制と計画をご報告する予定でした」

「……ドクトル・パウアー・シムリットとシムリット・パウアー文書の研究者、双方を一挙に葬るべく、企まれたテロだとお考えですか、陛下？」

「ドクトルを狙って、たまたまこれらのメンバーが同席していたのかも知れぬし、その逆かも知れない。今の段階で、犯人の意図をあれこれと憶測するつもりにはない。教授、伯爵夫人……」

研究室、あるいは財団のメンバーの思いもかけぬ遭難の知らせに、確かに顔面から一切の血流は失せていたが、それでもなお二人の女性は美貌の皇帝の凝視を正面から受け止め、キルヒアイスを感じさせた。あのビットテンフェルト上級大將ですら、皇帝ラインハルトの正面からの視線を受け止め、平然と立っているためには相当の気力を使うという。『女傑……二人を評したミハエルの言葉を思い出し、微笑するほどではないにしても元副官の描写の確さに納得する思いだった。』

「お二人には、身の安全が確認されるまで新無憂宮に留まって頂きたい。わざわざ、この部屋までご足労を願った理由がそれだ。ご不便をおかけすることになるが、拒否して頂くわけにもいかない」

「レオンハルト手記の研究を阻止しようとする人々がいる……とお考えでしょうか、陛下」

「そうお考え頂いてよろしい、教授。教授の研究室には憲兵総監部

から警護の部隊を派遣した。ラストエンテ財団の方も同じだ。その点については安んじて頂いて宜しいかと思つ」

「承知致しましたわ、皇帝陛下。陛下御自ら、そのようなお気遣いを頂き、喜びこれにすぐるものはありません……喜んで果せに従います」

「それは有り難い。お二人についてはリュックェ少佐がお世話をすることになっている。何なりとお申し付け頂きたい」

タイミング良くドアがノックされる。

「リュックェです。ローゼンマイヤー教授とロートリンゲン伯爵夫人をお迎えに参りました」

テオドル・フォン・リュックェは先日のキュンメル事件でラインハルトを狙った地球教徒を射殺した功績で少佐に昇進している。少尉時代ケンブ艦隊に所属し、アムリツァの前哨戦でヤン艦隊の後退について『彼らは本気で逃げ出しつつあります』とヤン・ウェンリーの意図を看破するなど、その経歴に於いて有能さを証明しているが、年齢はまだ二四歳になつたばかりである。

「よろしく少佐」

彼からすれば祖母の年齢に相当する。その二人に悠揚迫らぬ態度で挨拶され、さすがのリュックェも一瞬目を白黒させて硬直した。

「は、はい、よろしく願います……」

緊張を露わにぎくしゃくと硬直した様子で客人の先に立ったリュックェの姿に、ようやくラインハルトの頬にも微笑めいた柔らかなみが戻ってきたようだった。

「陛下……」

リュックェと共に二人の女性が姿を消すのを待ちかねてキルヒアイスは膝を進める。

「わかっている、ドクトル・パウアーシュミットのことだ」

「ドクトルは即死されました」

頭頂部をハンマーで殴られた衝撃にキルヒアイスが棒立ちになる……前に、ヒルダは急ぎ込んで言葉を続けた。

「……ことになっています」

「……ドクトルもターゲットの一人だとお考えですか」

「ドクトルは最初、欠席の予定でした」

ヒルダが答える。なお表情が硬く、声にも態度にも余裕がないのに気づき、キルヒアイスは眉を寄せた。

「偶然、予定がキャンセルされ、友人に誘われて席に連なつたとのこと。この友人は亡くなつております。また、先ほどのお二人も、招待を受けておられ、帝国大公からのお呼び出しがなければ出席されていたはずでした」

つまり、今回の事件が『シュミットパウアー文書』に絡んで起こされたものなのか、それともパウアーシュミット医師を狙い、偶然に文書の関係者を巻き込んだのか、前後の経緯を見る限りでは判然としなない。いつものヒルダとは別人のように、苦汁を孕んだ言葉は歯切れが悪かった。

「それで、パウアーシュミットの方だ」

ラインハルトの表情からもすでに微笑は消えている。グラスの水を、まるで苦いものを無理に飲み下すようにある姿がキルヒアイスの不安を誘った。キルヒアイスに向かって話さねばならない話題を抱えており、明らかに切り出すのを躊躇っていた。キルヒアイスにはそつ思えたのだ。

「……憲兵隊、および内国安全保障局からの報告だ」

無理に押し出す声は、常のラインハルトのそれとはかけ離れて

非音楽的にざらつき、キルヒアイスの耳を刺し通した。

「爆発物が仕掛けられていたのは、シュロスホテル・アム・カイザープラーツから届けられたケーキであることが判明した。ケーキを調製し、爆発現場に届けたのは、ホテルのメイン・ダイニングで副主任パティシエを勤めるウルシュラ・P・ザーネヘルシュテラーという女性だ」

「ウルシュラ・P・ザーネヘルシュテラー？」

『ウルシュラ』というファースト・ネームが『ウジー』という愛称に変換され、それが彼の最初の副官の婚約者の名前であることを理解するまで、滅多にないこと……と言つより、ラインハルトの幕下に入つて以来初めて、キルヒアイスは浮かべるべき表情にも、返すべき言葉にも窮して立ち竦んだ。

「ホテルは既にケースラーが、爆発物の形跡皆無であることを確認している」

ラインハルトの口調が更に苦く、吐き捨てるものに変つた。騒然とする現場を整理して負傷者を救出して病院へ搬送し、死者を収容すると共に遺留物を回収して分析チームに回付する。ケースラーの部下たちの仕事には批難の余地はなかった。現時点では、爆発物と容疑者を結びつける直接の証拠は検出されておらず、本人の供述や周囲の証言も犯行に結びつく内容はないという。にもかかわらずウジーの拘束が解かれないのは、彼女がシュロスホテル・アム・カイザープラーツから文理科大学へ直行していない可能性があるからだというのだ。

皮肉なことに、その可能性を示してしまったのはヒルダだった。ヒルダはウジーからホテルを出て文理科大学へ向かうというメール連絡を受けたが、憲兵隊がこのメールの発信地を調べたところ、

ホテルから大学への最短経路からかなり外れた位置であることが確認された。

「どこです？」

「ヘル・ニコラス・ボルテック、フェザン臨時自治領主私邸の近くでした」

「ボルテック？」

フェザンの統治は、艦隊と共に常駐するミュラーが担務しているが、ルヒンスキーが失踪して空位となった自治領主の席にはボルテックが就いている。既にフェザンの自治を認めるマンフレイト一世の勅許状に対してはラインハルトの手にとって廢勅が宣言されているが、二〇億のフェザン市民に対しては彼らのプライドへの考慮というものも必要だった。

ウジーからのメールには、ヒルダが不審を覚えるような内容は何もなかった。ただ、文理科大学という単語からパウアーシュミット医師による翌日のラインハルトの検診を連想し、医師に日程の再確認をしただけのことだった。それが、パウアーシュミット医師の生命を救う結果になるとは思いもかけなかった。

ヒルダからのメール連絡にパウアーシュミット医師は、翌日の検診の準備の再チェックのために、本来予定外だった歓迎会への席を中座して研究室に戻った。

爆発が起きたのはまさに彼が研究室に戻った直後だった。爆破事件の発生を知ったヒルダがケスラーに連絡を入れ、自ら大学に駆けつけたケスラーは、呆然と研究室内に座り込んでいたパウアーシュミット医師を発見し、憲兵総監部に保護。その足でラインハルトのもとに伺候し、第一報を入れた。

「これは明らかなテロです」

ケスラーの判断にラインハルトも異論は唱えなかった。この時点ではケスラーにもテロリストの刃を向けられた個人あるいは組織の検討はついていなかった。医師の生存情報の秘匿と身柄の保護を上申したのはヒルダだった。帝都に向かう途上、医師が二度にわたって生命を狙われた事実を鑑み、今回の事件も彼を狙ったもの……ヒルダはそう分析した。

ラインハルトとヒルダを困惑させたのが、『シュミットパウアー文書』研究の関係者の遭難と、それ以上に容疑者の身許だった。「帝国大公閣下の前副官タウゼントシュタイン大尉の婚約者がに容疑がかかっている以上、本件は帝国大公閣下のご裁量の域外として頂く必要がある」

内国安全保障局からの意見具申は、一度はラインハルトの激怒を誘ったが、ラング局長からの反論も辛辣なものだった。

「かのキユンメル事件に於いても、陛下はキユンメル子爵の罪はお問にならなかつたものの、近親者たるマリーンドルフ伯爵に対しては一時の謹慎をお申し付けになりましたではありませんか。帝国大公閣下の責任を問うというのではなく、閣下には今次事件からは距離を取って頂くことが重要なのです」

「……ということだ。オーベルシュタインからも、この事件についてはお前を関与させるなどの具申が上がっている……認めたくはないが、認めざるを得ない」

キルヒアイスは唇を噛みしめる。

「容疑者……フロイライン・ザーネヘルシュテラーはどこに拘禁されているのですか？」

「ケスラーに任せてある。ラングが聴取を要求してきたが、これは却下した……それと、明日の検診は延期になった」

爆発の余波で、機器の一部が不調を起こし、調整に二、三日かかる予定だという。それらの機器もパウアーシュミット医師とともに新無憂宮に迎え入れられており、三〇日には検診を実施できそうですという。

「明日の会議は予定通りに行く。準備を進めてくれ、キルヒアイス、それにフロイライン。今回の件は引き続きケスラーに担務させる……どうもすつきりしないな。この手の事件は、予は嫌いだ」
本音だったに違いない。門閥貴族たちの敵意と妨害を排除し、玉座への道を駆け上がるには敢えて謀略を駆使することも厭わなかったラインハルトであり、キルヒアイスである。しかし、自らが座す玉座を脅かす陰謀や陥穽を相手に地表で隠微な戦いを続けるのは彼らの本来の気質に反することおびたしかった。それがどうしてもやり続けねばならないことであつたとしてもだつた。

事件の波紋が意外な方面へ広がり、人々を驚かせたのは、その翌日のことである。御前会議の途中、部下からの緊急呼び出しを受け、中座したケスラーは満面の困惑を浮かべて議場へと戻つてきたのだ。

ケスラーは敢えて発言を求めなかったが、剛毅な部下の表情を彩る浮かべた困惑と衝撃の色合いに気づかぬラインハルトではなかった。

「何事だ、ケスラー」

「は……え、いえ、今、あえて報告するよつな内容では……」

「予が訊いている。昨日の件であつた、何か動きがあるなら報告せよ。あのよつな件、長引くは予の好むところではない」

「は……二つあります。一つは、例の爆発物のキーキを依頼した人

物の名が判明しました」

こちらは容易な調査で、昨日の内に判明していない方がおかしかつたのだが、シュロスホテル・アム・カイザープラーツのダイニング・ルーム支配人が記録を取っていたその名前は憲兵隊を困惑させた。

「フロレンティア・フォン・マイヤーハイム……マイヤーハイム伯爵の一員です」

「誰だ」

ラインハルトが言い終わらぬ内に、大きな音が一同の注意を惹いた。

ヒルダが棒立ちになり、蒼白な表情で硬直している。

「どうした、フロイライン？」

「マイヤーハイム伯爵家は、その……マリーンドルフ伯爵の……」
言いづらそつなケスラーの言葉をマリーンドルフ伯爵が引き取つた。

「私の妻の実家です。確かにフロレンティアという人物も一族の内にあります。帝都に住まいしておりますが、最近では滅多に顔を見せることもありませんので……ケスラー総監、そのフロレンティアが昨日の事件を企んだ、とそう仰るのか？」

「シュロスホテル・アム・カイザープラーツの記録が確認できた段階で、今、フロレンティア・フォン・マイヤーハイム邸に武装憲兵隊を派遣したところです。フロレンティア・フォン・マイヤーハイムの所在は不明。直ちに市内に非常線を張らせ、宇宙港にも出国情報照会しておりますが、該当する人物が移動した形跡は見つかつていない。

「……いずれにしろ、我が親族がこのような事件を企図したとあれ

ば、吾ら父娘にとつてこの場合は相心しからざる者として、退去させて頂くのが至当かと……」

立ち上がりかかったマリーン・ドルフ伯爵の動作をラインハルトの声が停止させた。

「待て、國務尚書。まだ、その名が上がっただけだ。そのフロレンティア・フォン・マイヤーハイムなる人物が真実、卿の親族であり、今次の事件を引き起こしたと証されたわけではない。実行犯自身が予の前で犯意を示したわけではない。卿とフロイライン・マリンドルフが退出するというのなら、帝国大公としてこの場にあるわけにはいかなくなる。予はそのようなことは認めぬ」

「は」
「ケスラー、そのパーティシエとやらに注文の主の面貌を語らせ、國務尚書の親族なる者に一致するか、ただちに確認せよ」

「それが、陛下」
苦虫を千匹もまとめて噛みつぶせばこつもなるつか、と思われ

るほどケスラーの表情は怒りと焦燥に満ちて見えた。
「容疑者として拘束しておりますが、ウルシュラ・ザーネヘルシュテラーなる者がさきほど自死を企てたとの報告が併せ入りました」

「なに!?!」
「緊急の手当を施しておりますが、毒物を隠し持つておつたもよつ

たことです。まだ生死は不明ですが、当面尋問には耐えられぬかと」
「……その者が証言できぬとしても、シュロスホテルに他の証人を

求めることもできよう。今更、予が卿に教示すべきことでもあるまいがな」
「既に手配をしておりますが、コンタクトを確保できておりません

同時にホテルの支配人を保護下においておけば宜しかったのですが、吾らにも些かの緩みがありました……」

わずかに苛立たしげにラインハルトは手を振った。

「言い訳は卿には似合わぬ。手を尽くせ、ケスラー」

「御意」

ケスラーが深々と頭を下げ、引き続きの手配のための退出を求め、ラインハルトは許可し、大きく息をつくると会議の首座に戻った。今回の事件を、ラインハルトは決して重大視はしていなかった。ことが『シュミットバウアー文書』なる怪しげな古文書を巡る陰謀であること、あるいはパウアーシュミットという一医師の生命を狙ったものであること、彼が思い悩むべき全銀河の統一と安定にくらべれば、細やかというも愚かすぎるほどに卑小なできごとしかその視野には映らなかつたとして当然だった。

だが、キルヒアイスに続いてマリーン・ドルフ伯爵、そしてヒルダまでが事件への関与の可能性を指摘され、事件についての発言を封じられる事態はラインハルトを苛立たせるに十分だった。だけでなく、実行犯とされた人物が若い女性で、自らの服毒で真相を闇に葬ろうとしたというのだ。事実の陰惨さが苛立ちに不快さを塗り重ね、ラインハルトを不機嫌さのただ中に突き落とした。

レンネンキャンプの拉致以来、若干の体調の不整もあつてラインハルトは迷いの中にあり、自らが迷いに馴れていないことそれ自体が彼の心理から安定を奪つていたとも言える。彼の代理者であるレンネンキャンプが、軍における経歴に不本意な形での終焉を強いられたのである。直ちに帝国軍の軍事力による報復を加えても良かったのだが、『正史』にもある通り、手中にした無制限の権力を最も高圧的な形で表現することに、あえて怯みとは言わぬまでも自戒の念

を抱いていたことは事実だった。

ケスラーが中座した後、御前会議の議論は二つに割れた。このまま自重し、自由惑星同盟の自壊を待つという意見が一つであり、ブラツケ民部尚書、リヒター、財務尚書を中心に民政部門の文官がこれを支持した。一方、レンネンカンフの拉致に引き続く同盟首都での不祥事と帝国からの要求の黙殺、あるいはサボタージユをバーラトの和約への明白な違反行為と見なして武力報復を主張したのは当然のように武官のグループだった。

キルヒアイスはどちらかと言えば前者の支持者ではあり、同盟の自壊を最初に企図した当事者でもある。がこの場では自説の主張を憚らざるを得なかった。レンネンカンフの件だけでなく、その後の同盟政府の対応は疎漏に過ぎた。

「レベロ議長が私の不在をうまく取り繕ってくれることを祈ってるんだけどね」

この時期、混迷を深める同盟政府の有様に、ヤン・ウェンリーは韜晦と当惑、僅かな期待を込めてそうコメントしたが、彼の希望が叶えられる可能性は皆無だった。帝国に対する同盟の態度はすでに外交的に非礼のレベルに達しており、キルヒアイスといえども自説に固執し過ぎれば、同盟に対しての度を越した寛容さとして非難の対象となるは必至の状況だった。

また、彼とて皇帝ラインハルトの意思を無視してまで和平論に偏するわけにはいかなかった。この黄金の覇者が内心に抱え込んでいるに違いない、事態の停滞に対して受動の立場に自身を置きすぎていることへの不満と不快さは、皇帝ラインハルトの旧い友人として察するに余りあった。

「陛下がこれまで常勝を誇られたゆえんは、歴史を動かしてこられ

たことにあります。今回にかぎり、御手をつかねて歴史に動かされるのをお待ちになるのですか」

オレンジ色の髪の猛将ビットェンフェルトが遅い長身を直立させ、豊かすぎるほどの声量を轟かせるのに、苦笑に似た視線が交錯する。ビットェンフェルトが主戦論を唱えるのは彼らにとって珍しくもないことだったが、次の瞬間、彼らの主君の示した反応が一同を驚かせ、議場内を一瞬に沈黙で満たしたのだ。

「ビットェンフェルトの言や良し」

風を巻く迅さでラインハルトが身を起こす。驚きと緊張に目を瞠る列席者の面上を、蒼氷色の視線が灼熱を帯びて薙ぎ払うかに見えた。

「予は考えすぎた。大義名分の最大にして至高なるものは、宇宙の統一である。その名分の前には、区々たる正当性など考慮に値せぬものであったのにな」

議場に満ちた静寂を、雷霆にも似たラインハルトの言葉が一直線に貫いた。

「ビットェンフェルト提督！」

「はっ！」

「卿に命ずる。黒色槍騎兵艦隊をもつて可及的速やかに同盟領へおもむくべし。惑星ウルヴァシーにあるシュタインメッツ提督と合流し、本隊が至るまで当地の治安を維持せよ」

「御意！」

我が意を得たりとばかりに頬を紅潮させ、オレンジ色の髪を勢いよく翻してビットェンフェルトが長身を折る。ラインハルトの御前でなければ、宇宙港に彼を待つ『ケーニヒス・タイゲル王虎』へ向けて、その足で駆けだしていったに違いない。

猛将の興奮ぶりに、ラインハルトは水晶を砕いてまぶしたかに見えるほどの微笑で応じると、視線をキルヒアイスに転じた。

「キルヒアイス、ミッターマイヤー提督と協議し、ただちに同盟領遠征の主力部隊を編成せよ」

キルヒアイスもまた席を立ち、主君であり我が半身たる金髪の若者の意を受けて跪礼を取る。

「主隊の総指揮は卿が執れ。向こう二週間以内に準備を完整し、シュヴァルト・フレンティア黒色槍騎兵艦隊を先駆としてフェザンからウルヴァシーへ向かうのだ。同盟に対する和戦の判断は卿の判断に委ねるが、レンネンカンブに対する不法、バラトの和約への違背について敵に同盟政府の責を問え」

「御意」

「フロイライン・マリンドルフ、近くレンネンカンブの消息を公的に明らかにし、同盟政府に対する責を問うての出兵を宣言する。今週の内にも原稿を完成させよ」

「はい、陛下」

ラインハルトの覇気がそのまま伝わったかのように、ヒルダはまだ先ほどの衝撃……テロ事件の首謀者としてフロレンティア・フォン・マイヤーハイムの名が語られたことによる……で失っていた顔色を取り戻していた。僅かに危惧するようにキルヒアイスに視線を走らせたが、敢えて異論も反論も唱えるには至らなかつた。ラインハルトの示した活力に、彼女自身圧倒される思いだったのだ。「それにしても陛下、」居城が完成するまで、常座がございませんな

「案ずるな、ビットェンフェルト」

華やかなほどの微笑みを湛え、豪奢な黄金の髪を翻らせながら

ラインハルトは応じた。後世、無数の史家・作家がラインハルトを描くとき必ず文中に言及する歴史的な台詞を、この時ラインハルトは端麗な唇から撃ち出したのだ。

「予に居城など必要ない。予のあるところがすなわち銀河帝国の王城だ。当分は戦艦『ブリュンヒルト』が玉座の置きどころとなる」
そして同じく多くの史家が指摘するように、この時、ラインハルトは自ら帝国艦隊の主力と共にフェザンへの移動を宣言している。帝国と同盟、二つの巨大な星間国家の領域をつなぎ、その統治の枢要の地をフェザンに定める。すでにラインハルトはその意思を明らかにしていたが、意思を実行に移すべく具体的な指示を発したのはこの時が最初だった。

ラインハルト自身は居城を『不要』としたものの、現帝都のインヘンズレ新無憂宮に代わって、巨大な国家の統治に不可欠な政治・軍事・情報の中核地となるべき、獅子トロンブルの泉の設計が着手されたのも、この時期だった。